第 12 回
学生政策提案フォーラム
in さいたま

テーマ：誰一人取り残さない持続可能な地域社会

日 時 令和 **5** 年 **11** 月 **26** 日［日］13:30～17:30

場 所 武蔵浦和コミュニティセンター　多目的ホール（サウスピア９階）

主 催 大学コンソーシアムさいたま※、さいたま市

※加盟大学：埼玉大学／埼玉県立大学／浦和大学／慶應義塾大学薬学部／芝浦工業大学／聖学院大学／日本赤十字看護大学さいたま看護学部／日本大学法学部／日本薬科大学／人間総合科学大学／放送大学埼玉学習センター／目白大学／国際学院埼玉短期大学

＜目次＞

○　開催概要　・・・・・・・・・・・・　1
○　審査委員一覧　・・・・・・・・・・・・　2
○　タイムスケジュール　・・・・・・・・・・・・　3
○　発表グループ・発表テーマ一覧　・・・・・・・・・・・・　4
○　政策提案の紹介
1　久保田ゼミ（埼玉県立大学）　・・・・・・・・・・・・　5
2　福島ゼミナール（日本大学）　・・・・・・・・・・・・　7
3　教育学ゼミ（国際学院埼玉短期大学）　・・・・・・・・・・・・　10
4　FINE（埼玉県立大学）　・・・・・・・・・・・・　12
5　芝浦 HADO チーム（芝浦工業大学）　・・・・・・・・・・・・　14
6　江口ゼミナール（埼玉大学）　・・・・・・・・・・・・　16
7　市川研究室（芝浦工業大学）　・・・・・・・・・・・・　18
8　鈴木ゼミ（国際学院埼玉短期大学）　・・・・・・・・・・・・　20
9　林紀行ゼミナール（日本大学）　・・・・・・・・・・・・　22
10　UHAS 食堂（人間総合科学大学）　・・・・・・・・・・・・　24
○　歴代受賞グループ一覧　・・・・・・・・・・・・　27

第 12 回学生政策提案フォーラム in さいたま開催概要

1　開催の趣旨

「大学コンソーシアムさいたま」加盟大学の学生が、さいたま市の政策について企画検討することにより、地域社会への愛着と関心を深め、もって、さいたま市の発展に寄与することを目的として開催する。

2　主催

大学コンソーシアムさいたま（加盟大学：埼玉大学、埼玉県立大学、浦和大学、慶應義塾大学薬学部、芝浦工業大学、聖学院大学、日本赤十字看護大学さいたま看護学部、日本大学法学部、日本薬科大学、人間総合科学大学、放送大学、目白大学、国際学院埼玉短期大学）、さいたま市

3　開催日時・場所

（1）日時

令和 5 年 11 月 26 日（日）　13 時 30 分から 17 時 30 分まで

（2）場所

武蔵浦和コミュニティセンター　多目的ホール

（さいたま市南区別所 7－20－1　サウスピア 9 階）

4　テーマ

誰一人取り残さない持続可能な地域社会

5　審査及び表彰

（1）審査

審査委員による審査の結果、合計得点が最も高いグループを最優秀賞とし、次点から 3 グループを優秀賞とする。同点の場合は、審査委員長が順位を決定する。

（2）表彰

最優秀賞及び優秀賞のグループに対し表彰を行う。

「第 12 回学生政策提案フォーラム in さいたま」審査委員

	団体名等	氏名	備考
1	事業構想大学院大学 事業構想研究所　教授	河村　昌美	審査委員長
2	尚美学園大学　芸術情報学部 音楽応用学科ビジネスコース　教授	井上　昌美	
3	生活協同組合コープみらい 理事	佐竹　美津江	
4	さいたま市都市戦略本部長	佐野　篤資	
5	さいたま市都市戦略本部 都市経営戦略部副参事（シティセールス担当）	海津　麻子	

タイムスケジュール

時間	内容
13:30	○開会
13:40	○政策提案の発表
13:40	1　久保田ゼミ（埼玉県立大学）
13:56	2　福島ゼミナール（日本大学）
14:12	3　教育学ゼミ（国際学院埼玉短期大学）
14:28	4　FINE（埼玉県立大学）
14:44	5　芝浦HADOチーム（芝浦工業大学）
15:00	休憩
15:10	6　江口ゼミナール（埼玉大学）
15:26	7　市川研究室（芝浦工業大学）
15:42	8　鈴木ゼミ（国際学院埼玉短期大学）
15:58	9　林紀行ゼミナール（日本大学）
16:14	10　UHAS食堂（人間総合科学大学）
16:30	休憩
16:50	○審査結果の発表・表彰
17:05	○審査委員長による審査結果の講評
17:15	○閉会
17:20	○記念撮影

※　当日の都合により変更する場合がありますので、ご了承願います。

第12回学生政策提案フォーラムinさいたま　参加グループ・発表テーマ一覧（発表順）

順番	大学名	グループ名	発表テーマ
1	埼玉県立大学	久保田ゼミ	「Mystery friendship」さいたま市を活性化
2	日本大学	福島ゼミナール	さeatま ～食べてmeal 育ててmeal～
3	国際学院埼玉短期大学	教育学ゼミ	保育学生の目から見た 保育の現場の問題点
4	埼玉県立大学	FINE（ファイン）	誰も取り残さないカレー屋さん
5	芝浦工業大学	芝浦HADOチーム	ARスポーツを通した世代間交流で SAITAMAを盛り上げよう!
6	埼玉大学	江口ゼミナール	やさしい行政
7	芝浦工業大学	市川研究室	さいたマッチング ～4つの軸からさいたま市を支える～
8	国際学院埼玉短期大学	鈴木ゼミ	がんと共に生きよう
9	日本大学	林紀行ゼミナール	彩×祭 ～地域の中に彩を～
10	人間総合科学大学	UHAS食堂	こども食堂を活用した 食生活改善プロジェクト

提出様式２

グループ紹介

大学名	埼玉県立大学
グループ名	久保田ゼミ
発表テーマ	「Mystery friendship」さいたま市を活性化
指導教員	久保田富夫
参加学生数	４名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】
・私たちの提案により、さいたま市の持続可能で地域の活性化が期待できる点
・学内で実施を行い長所、短所を踏まえた上で提案できたこと
・子供、大人、高齢者すべての年代を取り残さない提案になったこと
・経済面の負担をできる限り少なくしたこと
・見やすく、流れが一貫したスライドであること
・ロールプレイを設けた点

【反省点】
・学内では、応募者の中から抽選で QOU カードのプレゼントにしてしまい、経済的な負担があったこと
・学内の参加者が授業の兼ね合いもあり、少なかったこと
・学内では提案内容と完全に一致したものを模擬的に行うことが出来なかった

【所感】
・何度も討議を重ねたため、非常に良い提案になった
・ロールプレイにより、現実的にどのような提案内容なのかのイメージがつけやすいと感じた

政策提案概要書

私達久保田ゼミでは、SDGs 目標「11．住み続けられるまちづくりを」を掲げている。現代ではコロナの影響による減少、単独世帯の増加、さいたま市の交流における満足度が低いことが問題としてある。今回私たちは謎解きによって年代を問わず交流が促進され、すみやすいさいたま市を目指す政策を提案した。

背景：

多くの謎解きイベントが現在開催されており、子供からお年寄りまで幅広く参加することが出来る。

目的：

地域の人々の交流を促進

経済的・資源的に持続可能な社会へ

具体的な政策：

「Mystery friendship」さいたま市を活性化

問題内容：謎解き、知識問題⇒すべての年代が参加可能

謎解き配置場所：市の掲示板、シルバー元気応援ショップ、婚活その他

お知らせ方法：さいたま市の HP、回覧板、市役所、市の広報誌

期間：観客が見込まれる(夏休み等)二か月

応募方法：個人、主催者ガイド付きのグループ

形式：応募方法に同じ

さいたま市で「Mystery　friendship」を行なうことで地域の交流を促進する。さらに、経済的負担に配慮しまた、高齢者や障害のある方でも参加しやすい配慮によって誰ひとり取り残さないさず、住み続けられるまちづくりとなる政策を提案することとする。

提出様式 2

グループ紹介

大学名	日本大学
グループ名	福島ゼミナール
発表テーマ	**さ eat ま ～食べて meal 育てて meal～**
指導教員	福島　康仁
参加学生数	17 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

本提案における食育とは、栄養素の学習をするだけの一般的な食育にとどまらない。

体験する小学生を中心に、市民が誰一人取り残されることなく主体的に食について「育てる・食べる・考える」ことができる。従来の食育とかけ合わせ、実際に体験できる機会をさらに生み出し、食への興味から食意識向上に至るまでの筋道をどのように作り上げるか、といった検討要素の解決に力を入れた。食育を通して持続可能な地域社会を実現するために必要不可欠な仕組みを、小学生を起点に構築していく。

政策提案概要書

○現状・課題

令和３年さいたま市健康づくり及び食育についての調査結果によると、食育への関心があると答えた１０代の割合は４割と、半数にも満たない。この数値は他の政令指定都市である千葉市等と比較しても、低いことが分かった。また、さいたま市内でみると、年代別食育への関心があると答えた割合は、１０代が最も低い。 そこで、テーマの達成には、特に生活の中心となる児童生徒を対象とした、食育政策のさらなる推進が必要だと考えた。

○提言理由

さいたま市が持つ特徴である（１）完全自校式給食（普及率１００％)、（２）学校教育ファーム（普及率１００％）の２つを活かした食育推進政策を提言する。数値改善のためには、幼いころから、子ども達が楽しみながら主体的に食への関心を高められるような仕組みが不可欠である。

そこで、私たちは小学生が一番身近に食と関わる機会であり、誰もが経験するであろう給食を活用することとした。また、すでに現在実施されている学校教育ファームとコンポストを結びつけることにより、今まで以上に多くの場面で、食事への感謝の心や重要性を考えるきっかけになる。そのため、行政・地域・民間・市民が協働し、長期的かつ包括的に「育てる・食べる・考える」機会を設けることにより、主体的な食育活動の普及・確立につながると考えた。

○政策概要

私たちが提案するのは【さ eat ま】という長期的な食育体験である。

さ eat まとは、さいたま市と食育を掛け合わせたものであり、小学生を中心に大人も関わりながら給食メニューの考案・作成や従来の食育を行う。これは「１～６年生で継続的に関わること」「給食で食べられるという経験」を活かし、食への興味を生み出す最高の機会である。

そこで、小学生が①給食メニューを考案、②コンポストで堆肥作り、③野菜育成、④栄養価の学習、⑤給食で食べる、という一連の流れを経験する。さ eat まには、子ども達が能動的に取り組むことができる仕掛けが詰め込まれている。

○政策効果

市民(主に児童生徒)は長期的な取り組みを通して、総合的な「食(食育)」への興味、ひいては関心が高まる。

さいたま市は児童生徒を中心とした政策を展開することで、１０代の食育への関心を高

められる他、将来的に彼らの年代が繰り上がっていくことで、市全体の食育への関心を維持・向上させることができる。

市内事業者は、政策への協賛を通じ、市民に寄り添う事業者として市民に広く認知される。

官民が連携・協働し、共に児童生徒に向けた食育を推進していくことで、「持続可能な地域社会」の実現が期待できる。

提出様式２

グループ紹介

大学名	国際学院埼玉短期大学
グループ名	教育学ゼミ
発表テーマ	保育学生の目から見た保育の現場の問題点
指導教員	中村　敏男
参加学生数	３名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

・保育者を目指す学生の目線で、現在の保育現場を取り巻く問題点について考え、そのうえでよりよい保育環境を作るための方向性について政策提案を行います。具体的に取り上げたテーマは「保育者不足」の問題です。私たち 3 名は現在、卒業研究に取り組んでいますが、グループ研究の途中経過として提案させていただきます。

【反省点】

・2 年生となったこの 4 月から取り組んでいる卒業研究の中で検討を続けていますが、研究テーマの設定にけっこう時間がかかりました。その間、教育実習・保育実習などもあり、情報を収集するための時間に制約がありました。また研究テーマの特性として、「現在進行形」の社会問題であり、情報の分析をしているそばから新たな情報が入ってくるということもあり、提案内容のとりまとめに苦労しました。

【今回の取組を通して感じたこと】

・一般的な卒業研究では、研究テーマに沿った情報の収集とそれに対する考察が中心となります。今回「政策提案」として発表する機会をいただき、具体性を持った研究成果の掘り下げが必要となりました。今回の取組を通して、卒業後に私たちの職場となる保育現場には、様々な課題があることが改めてわかりました。日頃の授業の中では、幼い子どもたちとどのように関わるかといった、保育技術的な部分が意識の中心になりがちです。しかし、保育現場を取り巻く世の中の動きといった角度から自分自身の仕事のありようを考える必要もあるのだということを強く感じました。「専門性の高い保育者」の、その専門性の一つとして研究の締めくくりに向けて、しっかり取り組んでいこうと思います。

政策提案概要書

テーマ:「保育者不足解消に向けて」

提案Ⅰ：保育士配置基準の見直しより、保育士増員のための、自治体への予算支援を

・保育士配置基準について、（4，5 歳児については）制定以来 70 年以上も改定されていないことが、保育士不足の中で社会問題となっている。

・配置基準とは別に、自治体として独自の配置（＝増員）をしているところがある。（待機児童の状況など、保育者不足の状況には地域差がある。）

・国の基準としての「保育士配置基準」を見直す作業そのものに時間や予算がかかる。また、国の基準として全国一律に改定しても、地域差があり現状にそぐわない場合もあり得る。改定されれば、保育士増員のための予算や、人材発掘のために自治体や園の負担が増す。

⇒国の制度改革としての保育士配置基準見直しよりも、地域の実態に沿った保育士の増員を促進するために、自治体に対する予算支援を充実させるのが現実的ではないか。そうした国の支援を受けて、自治体としても保育士増員のためのさらなる予算措置を進めるべきである。

提案Ⅱ：潜在保育者の掘り起こしについて、「再就職」支援のための組織作りを

・保育者不足解消に向けた「潜在保育者」の掘り起こしが進められている。「潜在保育者」には･･･

＜Ａタイプ＞保育者の免許・資格を取得しても保育者にならなかった人

＜Ｂタイプ＞（結婚・出産・子育てなどにより）退職した、保育者経験者

の２通りがある。

・保育者不足解消の「即戦力」となるのは＜Ｂタイプ＞である。

・保育者を目指して学ぶ私たちの目線で考えたとき、免許・資格を取得しながら保育の職に就かなかった＜Ａタイプ＞が掘り起こされることには違和感がある。「なぜ保育者にならなかったのか」という点（意欲や意識の点）が気になるからである。

⇒＜Ｂタイプ＞の潜在保育者掘り起こしを促進するために、保育者養成大学（の同窓会）、保育現場、行政の三者が連携して、「再就職」を支援するシステム作りを進めるべきである。

○大学：卒業生に対するアフター・ケアの充実、保育現場との信頼関係強化

○保育現場：保育者確保のためのよりどころ

○行政：潜在保育者掘り起こし業務の焦点化

○再就職希望者：再就職に向けた相談場所の明確化

提出様式２

グループ紹介

大学名	埼玉県立大学
グループ名	FINE
発表テーマ	誰も取り残さないカレー屋さん
指導教員	臼倉　京子
参加学生数	４名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

本提案では「多様な人々の多世代交流による偏見のない社会づくり」を目指す。多様な人々の中でも共通項となる食「カレー」の誰からも愛される強みを生かして、「カレー」を介しより多くの人の参加を促せることを期待する。また「カレー」を介する場として公民館の利用を検討する。地域住民にとっては、利便性の高い公民館を訪れる機会となり、より身近に感じるとともに、その後も地域交流の場としての役割を担えるよう工夫する。

提案内容では、作業療法の知識を活かし、カレーを多様な人々（アレルギー、宗教、嚥下機能など）においしく味わってもらえるよう、メニューの段階（主食、辛さ、具、食形態）を設定した。加えて、カレーの調理工程は基本の動作（洗う、剥く、切る、入れる、混ぜる、盛り付ける）で構成され、部分的な動作と障害者のできる能力とマッチングし、地域の就労支援事業所との連携し就労準備の機会として活用できる。また、さいたま市が実行中の公民館などのリフレッシュ計画と一体化し、建物の環境を整えることや、公民館で現在行われている教室とのコラボ企画等も検討し、公民館を多様な人々が集う場としての活用することが期待できる。

反省点としては、誰も取り残さないというテーマを真に受けて、対象者の幅を広げすぎたために、様々な団体との連携が必要な企画となり、実現にはかなりの時間がかかると予想されることが挙げられる。具体的には、障害者の参加のためには未だ環境整備が不十分であり、すべての市民が楽しく安全に交流するための空間づくりが不可欠であることや、リフレッシュ計画が進んでいる施設によっては、追加の改修が必要になることも考えられる。

政策提案概要書

１，背景

さいたま市が目指す「誰一人取り残さない」未来像として、「市民一人ひとりがしあわせを実感できる”絆　きずな”で結ばれたさいたま市」、「誰もが住んでいることを誇りに思えるさいたま市」が挙げられる。さいたま市が持続可能な未来に向けて直面している課題として三つのことに着目した。一つ目は地域の関わりの希薄化。二つ目はさいたま市の政策の知名度の低さ。三つ目は一人暮らし高齢者の増加である。地域のかかわりの希薄化と政策の知名度の低さは、「さいたま市新しいまちづくりのための市民アンケート調査の結果」の「交流」「コミュニティ」の満足度・重要度が低いことから、地域交流の重要性に気付いていないことが原因なのではないかと考えられる。また、「さいたま市民意識調査」と「市民 Web アンケート調査」の結果より、市の情報発信・提供は”市報だのみ”の状況にありながら、市民各年代の約９割は伝わりやすい広報の必要性を感じている。

２，提案内容

現在実施中である「さいたま市公民館リフレッシュ計画」と同時に公民館に以下のような役割を付与したカレー屋を併設することを提案する。

1　地域交流

・市内で生産された食物を使用し、地産地消を行う。

・多文化多世代の多様な人々が集まれる場を提供する。

2　さいたま市の政策を広める

・カレーチケットを区報に掲載する。

・掲示板を使用し、政策を掲示する。

3　ボランティア活動

・募集対象は”すべての市民”として、障害者・外国人の方も共に働ける場を設定する。

4　段階のあるカレー

・多様な人々（アレルギー,宗教,嚥下機能）に適応できる段階（主食,辛さ,具,食形態）を設定する。

３，効果

上記のようなカレー屋を公民館に併設することで、地域の関わりが活性化して市民同士の助け合い基盤が形成されると同時に、公民館の利用者数が増加し公民館の重要度が向上することが期待される。また、掲示板を利用し、人が集まる場で政策を告知することで政策の認知度が向上する。さらに、地域交流の輪ができることで独居高齢者を孤立させない社会が作られ、彼らの QOL 向上や生きがいにもなると考える。これらがさいたま市が目指す「誰一人取り残さない」未来像につながっていくとともに、さいたま市の持続可能な社会に貢献できると考える。

提出様式 2

グループ紹介

大学名	芝浦工業大学
グループ名	芝浦 HADO チーム
発表テーマ	AR スポーツを通した世代間交流で SAITAMA を盛り上げよう!
指導教員	石﨑聡之、 真鍋宏幸、井尻敬、浜野学、深野真子
参加学生数	4 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

アピールポイント

AR スポーツのアピールポイントは老若男女関係なく実施することができるスポーツである。また、天候に左右されない。

所感

実際に異世代と交流しながら AR スポーツをやってもらったが、戦略を立てるためにコミュニケーションを取ったり、試合に勝った時には勝利を分かち合えたりできて楽しいという声をいただき、実験途中ではあるが異世代と交流しながらスポーツができることを証明しつつある。

反省点

反省点としては、今回扱った AR スポーツ(HADO)は iPhone 端末を使って実施するものなので機器の入れ替えに時間がかかったりするところはあった。また、1 時間の実験のため、もう少しやりたいという声も上がったので、もう少し試合ができるように効率よく回すことができれば良かったなと思った。

政策提案概要書

さいたま市のスポーツ施策の指針は、「健康で活力ある『』スポーツのまち　さいたま』～笑顔あふれる日本一のスポーツ先進都市の創造～」としているが、現状として運動不足を「大いに感じる」、「ある程度感じる」と思っている人が 82.7%いる。その理由として、仕事や家事の事情でできない、身近にスポーツをする施設が少ないといった理由が挙げられた。そこで今回は施策のサブタイトルである笑顔あふれる日本一のスポーツ先進都市の創造に着目し、一般的な従来のスポーツだけでなく AR スポーツに注目し、最新技術を知ってもらうことで新たなスポーツの楽しさを感じてもらうことを検討した。

今回は AR スポーツの代表格として知られる HADO（株式会社 meleap 社製）を用いる。HADO は性別・体力差・運動経験などを取り払って老若男女が参加できるスポーツであり、健常者のみならず、障害者も分け隔てず楽しめる、インクルーシブなスポーツでもある。今回の取り組みでは“HADO での異世代との交流”をテーマに掲げ、幅広い世代に HADO の体験をして貰い、市のスポーツ実施率の向上を目指すことを提案する。

第一段階の取りかかりとして、HADO を用いて高齢者と大学生の異世代間交流の効果について検証中である。具体的には、高齢者（12 名、平均年齢：73.3 歳）、大学生（12 名）を対象に週 2 回の HADO が体力・認知能力に及ぼす影響等について検討しているが、回数を重ねるにつれ、高齢者と大学生の活発なコミュニケーションが取られており、多様な戦略を考えるなど好影響が出ている。さらに、毎回チームを変えているため、お互いの参加者の名前を呼びあうなど年代を超えたコミュニティが形成されていると感じる。一方で、HADO 中の運動強度に目を向けると、高齢者では推定の最高心拍数を超えている人が多数おり、安全性については十分注意する必要があるものの、従来のスポーツ種目と比較して十分有益なスポーツなり得ると考えている。

このようなことから、『AR スポーツ「HADO」での異世代との交流で年齢の垣根を超えたスポーツの楽しさを知ろう！』を政策提案として提案する。

補足

HADO は、頭にヘッドマウントディスプレイ（HMD）、腕にアームセンサーを装着して行う対戦型スポーツである。AR(拡張現実)技術によって、エナジーボール（球）やシールド（盾）を出すことができ、スポーツと最新テクノロジーを組み合わせた次世代のスポーツとして注目を集めている。HADO のゲーム方法は 3vs3 で行い、1 試合の時間は 80 秒となっている。試合中は、相手にエナジーボールを当てて、相手のライフを破壊した回数が多い方が勝ちと言うゲームとなっている。

提出様式 2

グループ紹介

大学名	埼玉大学
グループ名	江口ゼミナール
発表テーマ	やさしい行政
指導教員	江口　幸治
参加学生数	5 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

人手不足に伴い、外国人労働者の積極的な受け入れを進める現代日本社会において、生活上の困りごとを相談できずに悩んでいる外国人労働者の事例をニュースで知った。

さいたま市における外国人市民の現状を調査した結果、最近の人口統計データに基づいて、外国人市民人口が今後も増加することが予想される。このことから、今後、同様の問題を抱える外国人労働者が増える可能性が高い。さらに、さいたま市が行った調査では、行政サービスを含む諸制度の存在に気づかないことで、本来受けるべき支援を受けられていない外国人市民の声が多く挙がっていた。

このような状況を踏まえ、誰一人取り残されない社会の実現を目指し、様々な困難に直面している外国人が「まずは行政に相談してみよう」と考えるような意欲を喚起し、支援を求める一歩を踏み出させるための情報発信が必要であると考え、本政策を提案するに至った。

本政策は、支援を必要とする人々、特に外国人市民に焦点を当て、SDGs の目標 10「人や国の不平等をなくそう」に沿っている。

政策提案概要書

【現状】

さいたま市では直近 3 年間で 4311 人もの外国人市民が増加している。コロナ禍前も増加傾向が見られたため、脱コロナ禍が進んでいる中で増加傾向は強まると考えられる。

現在さいたま市が外国人市民に向けた情報発信の取り組みは、①外国語版の市のホームページの運営、②さいたま市に住むにあたって必要な情報が複数の言語でまとめられたさいたま市生活便利帳、③多言語相談窓口の開設、④外国人に向けた SNS 発信などがある。

さいたま市の中で、制度の存在自体を知らなかったために本来受けられるべき支援を受けられなかった外国人市民の意見が挙がっていた。

【政策概要】

さいたま市の公式 YouTube チャンネルにおいて、外国人市民に向けたオリエンテーション動画を作成する。

動画の内容としては、さいたま市の中で生活をしていく上で必要な申請手続きの方法や受けられる支援の情報、ゴミ出しなどの地域における生活ルールを想定している。

動画には多言語の字幕をつけると共に、手続を行う窓口までの道のりや、必要な書類、記入事項など文面では伝わりづらい部分を視覚化する。

動画の終わりや概要欄などに、担当課や相談窓口などの情報を掲載することで、相談すべき場所がわからない状況を防止する。

【効果】

・多言語の字幕をつけることで、外国人の方々が理解しやすいようになる。
・文面でわかりづらい部分を、動画化することによって手続きなど文面で伝えにくい情報を視覚化して説明できる。
・本来受けられる制度の認知に繋がる。
・正しい生活のルールなどを学ぶことで、地域社会におけるトラブルを防止し、多文化共生社会の実現に繋がる。
・動画化することで、役所に訪れることができない人も自分が見たい時に気軽に視聴し情報を得ることができる。

提出様式 2

グループ紹介

大学名	芝浦工業大学大学
グループ名	市川研究室
発表テーマ	さいたマッチング～4 つの軸からさいたま市を支える～
指導教員	市川 学
参加学生数	30 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【市川研究室について】
市川研究室では，データサイエンスを用いた定量的評価やシミュレーションを用いた施策評価検討を題材に様々な領域を扱っている．また，所属する学生一人一人が別の領域を研究する多様な研究室であり，個々の研究に加えて社会とつながるためのプロジェクトを同時並行で取り組んでいる．取り扱うテーマは「社会課題」であり，課題に合わせて様々な手法を用いて取り組んでいる．

【今回の提案について】
今回の提案について，市川研究室のメンバー全員を 4 つのチームに分けて，それぞれの課題について取り組んだ．それぞれのチームが，さいたま市の現状分析を行い，さいたま市が取り組んでいることや足りない部分，その他の市で取り組んでいることなどを調査し，さいたま市にとって必要なことを考えた．

政策提案概要書

【背景】

さいたま市について現状分析を行った結果，4 つの課題について取り上げた．それぞれについての具体的な問題は以下のとおりである．

①通勤者などの来訪者に対する災害支援

・転出入が多いが，来訪者が災害に関する情報をどこで見ればいいかわからない

・災害が起きた場合どうすればいいかわからない

②在日外国人に対する医療支援

・在日外国人が病気に掛かった際に，どこの病院に行けばよいか分からない

・在日外国人が病気に掛かった際に，病院で症状を正確に伝えられない

③地域経済の活性化とイノベーションの促進

・地域内の新たなビジネスアイデアや技術の開発を支援し、地域経済の成長と雇用の創出を促進する

④誰もが自転車利用できる支援

・自転車利用のポテンシャルは高いが，有効活用しきれていない．

・いろいろな層（高齢者，若者，ファミリー層，外国人…）が住んでいるが，転出入が激しくルールが浸透しない．

【提案】

①通勤者などの来訪者に対する災害支援

災害時, 駅を利用している人のスマートフォンや, ホログラムを用いて駅の壁などにその場にとどまるよう誘導する．一定時間が経過した後，避難場所に誘導する．

②在日外国人に対する医療支援

さいたま市の在日外国人が病気にかかった際に, 既存の外国人向け診療所検索はあるものの，日本と諸外国の診療プロセスの違いから，十分に既存機能を生かせていない点に着目した．日本と諸外国の容易に診療機関の選択が可能になるようにする．

③地域経済の活性化とイノベーションの促進

大学生によるスタートアップ企業設立を促進するファンドの導入をすることで, 知の拠点である大学に通う生徒に機会を提供する．それにより，地元拡大，創生に繋がり，これからのさいたま市に密着した魅力の向上を図る．

④誰もが気持ち良く自転車利用できる支援

さいたま市は自転車利用のポテンシャルが高いが、ルールやマナーに不満がある市民が多い。また、街頭犯罪の中で自転車の盗難が最も多い。そこで、放置自転車を修理して市民に格安でレンタルすることで収入を放置自転車対策に使える、持続可能なレンタルサイクルを提案する。

提出様式２

グループ紹介

大学名	国際学院埼玉短期大学
グループ名	鈴木ゼミ
発表テーマ	がんと共に生きよう
指導教員	鈴木　玉枝
参加学生数	２名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

私たちのグループでは、「がんと共に生きよう」をテーマとしてがん検診の受診率向上をめざすための政策提案を考えました。

がんに罹患した場合の経済負担が大きいため若いうちからがんについての理解を深め、がん検診に行くことへの重要さを知り、疾患や治療などの知識と理解の向上を目標としています。

また、健康増進に対する意識を高め、健康マイレージアプリのさらなる普及を目的とした提案をいたします。

政策提案概要書

【政策提案骨子】

わが国の死因の第 1 位は悪性新生物（がん）であり、年間 30 万人以上の国民が死亡し、年々増加傾向にあります。また、国民の 2 人に一人が罹患する代表的な病気ですが、その症状や治療に対する認知度は、まだまだ低いといわれています。

がん患者の減少、早期発見に重点をおき、さいたま市の健康マイレージアプリの機能をさらに活用した政策提案をします。

健康マイレージアプリの認知度を上げるための工夫、がん患者が生きやすい、暮らしやすい地域社会となるような提案をします。

健康増進を呼びかけるだけではなく、令和 10 年にさいたま市に新設予定の道の駅を利用した提案を考えています。

【提案効果】

健康マイレージアプリの認知度の向上により、がん検診の受診率向上、すべての人びとが暮らしやすい、健康増進意識の高いさいたま市となることが考えられます。

提出様式 2

グループ紹介

大学名	日本大学
グループ名	林紀行ゼミナール
発表テーマ	彩×祭 ～地域の中に彩を～
指導教員	林　紀行
参加学生数	17 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

本提案では、新型コロナウイルスへの感染対策が緩められた後に開催が再開された「お祭り」に着目し、持続可能な地域社会の実現に不可欠である地域住民間のつながりを構築することを内容とするものである。地域の住民が集まる場の一つであるさいたま市のお祭りで、「生の声」を調査し、その結果を集約する過程で、データだけでは測ることのできないさいたま市の地域社会の現状を確認することができた。そして、そこから浮かび上がった諸課題を解決する手法を提案することを目的とし、本提案を作成した。

これまでの地域イベントは、大人が運営し、子供が参加するという形式が多かったが、この関係を逆転し、子供や若者が運営し、親や地域の高齢者が楽しんで参加するイベントにすることで、運営する側が将来は参加する側へと変わり、次世代の運営する側が参加する側へと変わっていく「関係が循環していくサイクル」が期待でき、子供から高齢者まで、誰一人取り残すことのないイベントにすることが可能となる。また、チャレンジスクールという既存の小学校における活動を活用すること、校内で収まるイベント規模、多くの方々が楽しめるようなポイント制にすることで、準備段階から集客、開催までの実現性にもこだわった。

反省点としては、小学生とともに作っていくという点にこだわったことで、枠組みは決まっているものの、提案する内容の具体例はあくまでも一例であり、実際の内容は小学生の「案出し」に依存してしまう点である。今回の提案では、チャレンジスクールの体験や小学生、コーディネーターに話を伺うことはできたが、さらに小学生に「案を出してもらう」という点まで進めば、より具体的な案を出すことが可能になったと考えられる。

子育て世代の転入者が全国 1 位を維持し続けている、さいたま市の特性を踏まえたうえで「誰一人取り残さない持続可能な地域社会」の実現のために、「子供が中心」という形にすることで、実効性、実現可能性の両立した提案であると考えている。

政策提案概要書

① 現状・課題

お祭りの現地調査やさいたま市民意識調査結果から、さいたま市の現状として、お祭りをはじめとする地域イベントは多いが、住民で地域交流ができていると考えている人は少ない点と、０～１４歳の転入超過数が８年連続第１位であり、新住民と既存住民との関係の希薄化という点を挙げた。この観点から、まずは転入者層と既存住民との交流を促すことで地域社会全体の活性化を図ることができると考えた。

② 政策概要

「彩×祭～地域の中に彩を～」では、現在さいたま市内の小中学校で行われている「チャレンジスクール事業」において、大学生ボランティアがコーディネーターとして小学生とともに地域交流のできるイベントを企画し、開催する祭りである。

とはいっても、小学生とともにすべてを考えるということは現実的ではない。そこで、今回提案するいわゆるスタンプラリー方式をモデルとし、チャレンジスクール内では小学生と大学生がともに「多世代交流」「地域理解」「だれでも楽しめる」イベント内容を企画していくものである。

彩祭では、小学生から高齢者までの多世代で構成するグループを作り、スタンプカードに書かれた順で共に各ブースを回っていく。各ブースでは、手作りボウリングやゴム鉄砲射的などの小学生らしいブースからさいたま市クイズや地域の伝統芸能団体（お囃子や獅子舞、舞踊など）による体験ブースなどを設けることにより、子供から高齢者まで楽しめることのできるイベントとすることができる。

③ 効果

小学生が中心となることで小学生の親は彩祭への参加が見込まれる。そこで親同士のつながりを生むことでさいたま市が８年連続全国１位である子育て世代の転入者層と既存住民層との交流の機会とすることができる。また、広報誌、広報車、回覧板、小学生による呼びかけを地域住民に対して行うことで小学生の保護者以外の地域住民も呼び込み、さらなる地域住民同士のつながりが生まれることを期待できる。

市民はこれまで特に地域活動に参加していなかった層から転入者層、既存住民とのつながりを持つことで、地域に対する愛着、住民同士の自治機能が向上する。

さいたま市としては、2030 さいたまにおいて取り組むべき課題と設定している「高齢期を迎 える人々や女性、若者の参画、更には大学や事業者等の多様な主体の参画を促し、地域力を維持・向上させていく」を達成することができ、持続可能な地域社会の実現をすることができる。

提出様式 2

グループ紹介

大学名	人間総合科学大学
グループ名	UHAS 食堂
発表テーマ	こども食堂を活用した食生活改善プロジェクト
指導教員	梅國 智子
参加学生数	11 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

アピールポイント

誰もが生きていくうえで欠かせない食を身体的サポートと精神的サポートの 2 つの面から考える。身体的面では栄養学を学ぶ学生の献立を提供し、精神的面では食育イベントを通してどの世代の方も楽しみながら食について知ることができる。

反省点

・こども食堂に向けて献立を考案したが食材が足りない場合がある。

・食育イベント行う際に人が集まらない可能性がある。

所感

オープンキャンパスて行った際に好評だった模擬授業を参考にしたことで、楽しく専門性の高い食育イベントを考案することができた。

食育イベントは 2 つのうち 1 つは実際に行うことができ、楽しんでいただけた。

もう 1 つのイベントは、オープンキャンパスて行った際に好評だった模擬授業を参考にしたことで、楽しく専門性の高い食育イベントを考案することができた。

政策提案概要書

食は人が生きていく上で必要不可欠なものである。食環境を整え、食生活を正すことで疾病予防や QOL の向上、人と人との繋がりを持たせることができる。そこで今回は身体的、精神的に食生活をサポートする政策内容を検討した。

乱れた食生活が与える大きな影響の 1 つに生活習慣病がある。現在の日本の主な死因のうち、48.2%は生活習慣病が関わる病気である。そして小学 5 年生の肥満傾向が増加していることから、将来生活習慣病になる可能性が高くなっているといえる。また、さいたま市の食育関心度は目標値 85%に対し 62%と大きく下回っている。食育関心度が低いと食生活が乱れる可能性が高い。そこで子ども食堂を活用し身体的なアプローチとして「栄養学を学ぶ学生による献立の提供」、精神的なアプローチとして「食育イベントの開催」を提案する。

1 つ目の政策では子ども食堂にアンケートをとり、嗜好や使用食材などを加味した栄養バランスの整った料理の献立を提供する。それにより子ども食堂の負担を減らし、子どもの栄養サポート、味覚の矯正を図る。

2 つ目の政策として、野菜の断面を使ってポストカードを作る「野菜スタンプ」と普段食べているものの栄養価を比較する「栄養トーナメント」というイベントを開催する。野菜スタンプでは色々な野菜をいくつかの方法で切さいし、絵の具を使ってポストカードにスタン

プをする。子ども食堂にて親子で参加していただくことで野菜に興味を持たせたり、会話を発展させ維持を図る。栄養トーナメントではトーナメント形式にした紙を配り、参加者に結果を予想していただき、結果発表を行った後具体的な栄養教育を行う。汎用性が高く幅広い年齢層に対応することができ、子ども食堂を知らない方々にも宣伝することができる。

歴代受賞グループ一覧

第１回　平成２３年１１月２０日（シーノ大宮センタープラザ　１０階多目的ホール）

提案テーマ　さいたま市を魅力あるまちにするための政策・事業

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	内田ゼミ	共栄大学	ツール・ド・さいたま ～日本最大級のサイクルイベントへの開催～
優秀賞	花盛り（はなざかり）	聖学院大学	さいたま市空き地・休耕地活用事業
	埼玉県立大学 作業療法グループ	埼玉県立大学	義務教育におけるノーマライゼーションをめざして
	外山ゼミナールチーム ～100 年の絆～	日本大学	さいたま市これからの 100 年 ～官学協働計画～

第２回　平成２４年１１月１８日（シーノ大宮センタープラザ　１０階多目的ホール）

提案テーマ　さいたま市のブランド力の向上のための政策・事業

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	内田ゼミ	共栄大学	さいたま発の盆栽ブランドの開発
優秀賞	ＳＰＵ☆ＯＴ９	埼玉県立大学	さいたま１０の区地域の輪 ～地域交流活性化を目指したシステム構築～
	外山ゼミナールＡ	日本大学	『鉄道のまち　ルネッサンス計画』
	外山ゼミナールＢ	日本大学	さいたま１１区を創ろう！しあわせタウン

第３回　平成２５年１１月２４日（武蔵浦和コミュニティセンター　９階多目的ホール）

提案テーマ　さいたま市を「選ばれる都市」にするための政策・事業

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	福島ゼミナールＡ	日本大学	ＩＣＴによる交通政策
優秀賞	内田ゼミ	共栄大学	人形の町さいたまの復活
	社会福祉学科３年	埼玉県立大学	都市交縁（こうえん）計画～公園から始まる地域のつながり～
	川俣ふぉーらむ	埼玉県立大学	市民に愛される街～市民参加型の新しいフォーラムの形～

第４回　平成２６年１１月１６日（武蔵浦和コミュニティセンター　９階多目的ホール）
提案テーマ　市民一人ひとりがしあわせを実感でき、市民や企業から選ばれる都市にするために

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	福島ゼミナールＡ	日本大学	振り込め詐欺対策
優秀賞	健康栄養　＆　幼児保育学科 コラボチーム	国際学院埼玉短期大学	『さいたま市ヘルスプラン 21 目標達成に向けて』～“ヌゥ”ってメタボじゃない!? このままで大丈夫!? ～
	Let's OT!	埼玉県立大学	コミュニティ強化のための「心の視覚化政策」
	内田ゼミ	共栄大学	低糖質でメタボ中年からスイーツ紳士へ～　健康都市　さいたま　～

第５回　平成２７年１１月８日（武蔵浦和コミュニティセンター　９階多目的ホール）
提案テーマ　さいたま市のおもてなしスタイル

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	齋藤ゼミナール	埼玉大学	うちわによるオリンピックの暑さ対策
優秀賞	Shall We OT？	埼玉県立大学	Boys, be ambitious 計画～高校生ボランティアと医療アプリの普及について～
	福島ゼミナールＡ	日本大学	文化芸術によるおもてなし
	福島ゼミナールＢ	日本大学	まちの美化によるおもてなし

第６回　平成２８年１１月２０日（シーノ大宮センタープラザ　１０階多目的ホール）
提案テーマ　東日本の交流拠点都市

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	OT’S	埼玉県立大学	ウォーキング×イベント～東日本まるごと健幸プラン～
優秀賞	福島ゼミナールＡ	日本大学	かるたを使って発信～東日本の魅力が見つかるた
	福島ゼミナールＢ	日本大学	～備えあれば憂いなし～シェルたまプロジェクト
	齋藤ゼミナール	埼玉大学	Relations of Victory～VR を活用した広域連携による観光促進事業～

第７回　平成２９年１１月１９日（シーノ大宮センタープラザ　１０階多目的ホール）
提案テーマ　若い世代の定住促進

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	齋藤ゼミナール	埼玉大学	３S System Saitama Scholarships return Support～定住のための若者支援制度～
優秀賞	UHAS.com	人間総合科学大学	埼食健美　健康ダイエット in さいたま
	福島ゼミナールＢ	日本大学	SAITAMArriage　さいたマリッジ
	OT’ASH	埼玉県立大学	自分らしく生きられるさいたま市～あいたまアプリでさいたま？からさいたま！へ～

第８回　平成３０年１１月１８日（シーノ大宮センタープラザ　１０階多目的ホール）
提案テーマ　健康で活力ある「スポーツのまちさいたま」

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	チーム青志	人間総合科学大学	彩☆スポ ジュニア栄養サポート制度
優秀賞	齋藤ゼミ	埼玉大学	Reward×Walk ～歩いて手にする商品と健康～
	健康増進授業	芝浦工業大学	大学を拠点とした健康増進授業の取り組み ～健康で、笑顔のあふれるまちづくりのために大学ができること・・・～
	押久保ゼミ	埼玉県立大学	スキマ時間でスポーツを身近に ～ふっくらたまちゃんスリム化作戦～

第９回　令和元年１１月１４日（武蔵浦和コミュニティセンター　９階多目的ホール）
提案テーマ　東京 2020 大会に向けたおもてなし

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	さいたまオアシスプロジェクト	芝浦工業大学	東京オリンピック・パラリンピック開催時の雪の利活用促進について
優秀賞	斎藤ゼミナール	埼玉大学	まんがを用いた情報発信
	福島ゼミナール A チーム	日本大学	シュート風呂敷 in さいたま
	福島ゼミナール B チーム	日本大学	フォトたまリー

第 10 回　令和３年１１月７日（オンライン開催）
提案テーマ「SDGs」先進都市

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	久保田ゼミ	埼玉県立大学	さいたまに気づこう！広めよう！ 家でも外でも健康アプリ
優秀賞	TeamA	埼玉大学	NEXT SDGs―SDGs 未来都市さいたま市への提言
	最適システムデザイン研究室	芝浦工業大学	MaaS を想定したコネクティッドバスシステム
	斎藤ゼミナール	埼玉大学	雨天決行！歩いて健康プロジェクト

第 11 回　令和４年１１月２０日（シーノ大宮センタープラザ　１０階多目的ホール）
提案テーマ　誰もが「住みやすい」「住み続けたい」と思えるさいたま市の実現

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	福島ゼミナール	日本大学	さいたま市×ブックマーク～さいたマーク～ 栞でつくる・つながる・まちへの愛着
優秀賞	UHAS　dining	人間総合科学大学	子どもの未来を繋ぐ～あったかサポート～
	環境基盤研究室	芝浦工業大学	高温化する夏季においても 安全に安心して歩けるまちの実現
	チーム uhas	人間総合科学大学	居酒屋×食育～お通しから見直そう～

第 12 回学生政策提案フォーラム in さいたま
開催プログラム

事務局
さいたま市　都市戦略本部　行財政改革推進部
TEL 048-829-1106　FAX 048-829-1997
MAIL kaikaku@city.saitama.lg.jp